

明治初期におけるアメリカ人 女性宣教師の日本報告

齋藤元子

- I. はじめに
- II. メソジスト監督派教会女性海外伝道協会と日本伝道
- III. 機関誌 *Heathen Woman's Friend*
- IV. *Heathen Woman's Friend*に見る日本関係記事
 - (1) 日本関係記事の特徴
 - (2) 書き手としての女性宣教師の特徴
- V. 一女性宣教師の見た明治初期の日本
 - (1) メアリー・ホルブルックとその報告書簡
 - (2) ホルブルックの日本報告とその特徴
- VI. おわりに

I. はじめに

19世紀アメリカのプロテスタント教会は海外伝道に多大な情熱を注ぎ、各教派が競い合うように宣教師を異教地に送り出した。そして世紀後半は宣教師の多くが女性によって占められた。日本へも、開国とともに様々なプロテスタント教派が宣教師を派遣し、女性宣教師は、女子教育機関の設立を中心に日本人女性への伝道活動を積極的に展開した¹⁾。

女性宣教師は、伝道地での活動状況のみならず、その土地の地理や歴史、文化などを熱心に報告し、海外伝道への理解を促す努力を重ねた。女性宣教師の報告は、各教派の女性海外伝道協会が発行する機関誌に掲載され

た。当時アメリカやカナダに住む女性の大半は、自分たちの大陸以外の世界について、これらの女性宣教師の報告から多くを学んでいたと言われている²⁾。日本に関しては、19世紀末には、外交官、お雇い外国人、商人などによって書かれた見聞記も複数出版され、日本の情報は西欧世界にかなり伝達されていたが、宣教師の文書は、第一次世界大戦までは量的に群を抜いていた³⁾。

地理学では、日本に関する地理学的知識 (geographical knowledge) の西欧世界への普及という観点から、欧米人によって書かれた明治期の日本見聞記に関心を寄せてきた。だが、女性による見聞記は、英国人女性旅行家イザベラ・バードの *Unbeaten Tracks in Japan* を除いては、ほとんど注目されていない⁴⁾。本研究は、明治期の日本に関する情報を広くアメリカに伝えた女性宣教師の報告を考察し、その内容を明らかにするとともに、地理学的知識を包含する史料としての評価を提示することを目的とする。研究の対象として、プロテスタント教会の各教派内に組織された女性海外伝道協会の中で、最大の会員数を擁したメソジスト監督派教会女性海外伝道協会 (The Woman's Foreign Missionary Society of The Methodist Episcopal Church) を取り上げ、その機関誌である *Heathen Woman's Friend* (『異教女性の

キーワード：アメリカ人女性宣教師，日本報告，明治初期，ヴィクトリア期の女性

友』に掲載された日本に関する報告を考察する。

本論の構成は、第Ⅱ章においてメソジスト監督派教会女性海外伝道協会成立の背景と日本での活動、第Ⅲ章において機関誌 *Heathen Woman's Friend* についての解説を行った後、第Ⅳ章において、日本での活動が開始された1874(明治7)年より *Heathen Woman's Friend* に掲載された日本関係記事について紹介と分析を行う。その際、同時代に活動していた女性旅行家が残した記録との比較をも試みる。さらに第Ⅴ章において、明治初期に来日した一女性宣教師の日本到着から1880(明治13)年までの一連の報告書簡に焦点を当て、その内容をより詳しく分析する。考察の対象期間を1880年までとしたのは、以下の理由に基づいている。1880年イザベラ・バードの *Unbeaten Tracks in Japan* が出版されたのを契機に、欧米人旅行家による日本見聞記の出版が盛んになる。1880年以前は日本に関する英文の文献は少なく⁵⁾、女性宣教師の報告は自らの直接経験あるいは宣教師仲間からの話をもとに書かれたものがほとんどである。したがって、明治初期の日本の様子を伝える数少ない報告であると同時に、文献からの知識ではない女性宣教師本人の印象を読み取るにふさわしい時期の報告と判断した。

Ⅱ. メソジスト監督派教会女性海外伝道協会と日本伝道

メソジスト監督派教会⁶⁾ 女性海外伝道協会は、1869年3月8名の女性によってボストンで結成された。その動機は、同教会からインドに派遣されていた男性宣教師の妻の報告により、インドでは女性が社会的に隔絶された状況にあるものの、男性宣教師はそれに対して無力であるのを知ったことによる。そして、インドの女性のために働けるのは、彼女たちとの接触が許される女性宣教師であり、その派遣がぜひとも必要であるとの要請を受

けて行動を起こしたものである。女性は牧師や役員になることが認められていなかった当時のキリスト教界にあって、女性だけの組織を立ち上げることは教会内部からの反発を招いたが、財政的な支援を求めないことなどを条件に承認された。同年11月に2名の女性宣教師をインドに派遣したのを皮切りに、中国、日本、南米、メキシコ、アフリカ、ブルガリア、朝鮮、イタリアへと女性宣教師を送り出し、その数は1895年までの約25年間で267名に及んだ。この間、アメリカ国内の会員数153,584名を擁する最大の女性海外伝道協会に成長した⁷⁾。

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会が他教派の女性海外伝道協会を凌ぐ勢いをもって成長した要因には、その組織の緻密さに負うところが大きい。特に地理的な組織形成を大規模かつ詳細に行った点に特徴がある。アメリカのプロテスタント教会は、カトリックや英国国教会とは異なり、教区といったような地理的線引きによる領域性に対しては概して規定が曖昧である。だが、メソジスト監督派教会は、カトリックの位階制をモデル修正した監督制を採用して、地理的にも系統立った機構を形成した。女性海外伝道協会もこの機構を生かす形で、全米に支部を展開し、その下に補助協会(auxiliary society)⁸⁾を配して、単独教派で初めて全国規模の女性組織を作り上げた。また一方、活動形態は、上意下達のスタイルを取らずに、各支部に様々なプロジェクトを一任させ、会員としての自覚や参加意識を促進させたことも組織の発展につながった⁹⁾。

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会の日本伝道は1874(明治7)年に始まる。メソジスト監督派教会は、既に前年の1873年に男性宣教師を日本に派遣しており、横浜、東京、函館、長崎で伝道活動が始められていた。同教会は伝道地においても、活動の展開を左右する地理的要素を重視した。上述の4都市を

宣教師の駐在拠点地 (station) として選定するに当たっては、十分な調査を行った。その選定基準としたものは、外国人地域社会ならびにアメリカ合衆国領事による保護の有無、蒸気船による交通手段の可否、日本の将来に及ぼす影響力、他のプロテスタント教会の活動状況などであった¹⁰⁾。

女性宣教師は、横浜、東京、函館、長崎に加えて、福岡、名古屋、弘前、仙台、米沢、鹿児島、熊本、大館に女学校を設立し、女子教育に携わることを中心として、日本人女性へのキリスト教伝道に力を注いだ¹¹⁾。また1897(明治30)年には、横浜に常磐社という出版社を起こし、日本の女性と子供のための邦文書籍や雑誌を発行して、文書による伝道活動 (printed evangelism) も行った¹²⁾。明治末までにメソジスト監督派教会女性海外伝道協会より日本に派遣された女性宣教師の数は83名にのぼった¹³⁾。

Ⅲ. 機関誌 *Heathen Woman's Friend*

協会設立後、役員が直ちに着手したのが、機関誌の発行であった。アメリカのホームベースと外国のフィールドとの間に自由なコミュニケーションが開かれていることが、協会の永続性と成功の鍵を握るとの確信による行動である。その趣意書には「この雑誌は異教女性のために働く仲間たちのために特別に捧げられるものであり、異教地での実りある働きを例証する興味深い事実や出来事が満載されるであろう。異教の人々の生活習慣、キリスト教伝道の前に立ちはだかる様々な障害、その中で宣教師たちの活動の様子などが伝えられるであろう。女性による女性のための海外伝道という運動に関心を抱くすべての人が興味をもって読める雑誌を目指すのみならず、子供たちの海外伝道に対する共感を呼び起こし、宣教師の活動についてのより正確な知識を提供することをも志す。したがって、雑誌の定価は、だれもが購入できるよう

に、年間30セントに抑える。」¹⁴⁾と記されている。

協会発足3カ月後の1869年6月、*Heathen Woman's Friend*と名付けられた機関誌第一号が発刊された。同誌は以降月刊誌として毎月欠かさず出され、1896年に誌名を *Woman's Missionary Friend* に変更¹⁵⁾ した後、1940年8月まで実に70年以上にわたって発行され続けた。創刊号の頁数は僅か8頁であったが、翌年には12頁、さらに16頁(1872年)、24頁(1875年)、28頁(1886年)、30頁(1893年)と増頁されていった。また初年度の定期購読数は4,000であったが、翌年度には3倍の12,000、1872年には25,000を数えた¹⁶⁾。

趣意書にも見られるように、子供も機関誌の読者として取り込もうとした背景には、将来の宣教師を育成するという目的のほかに、協会の資金源として子供からの献金にも期待する意図があったからである。協会の設立に当たり、教会には財政的援助を乞わないことを確約したものの、女性だけの組織であるが故に、大口の献金は望めず、少額の献金を多数集めなければならなかった。機関誌には、子供のための特別な頁が設けられ、女性宣教師から送られてきた異教地の童話や子供の話などが掲載された。1890年には子供の頁を独立させて、*Heathen Children's Friend* という月刊誌を創刊、年間購読料15セントで販売し、5年後には17,000の購読者を得た¹⁷⁾。

機関誌 *Heathen Woman's Friend* は、3つの大きな柱によって構成されている。第一は女性宣教師からの報告を中心とした伝道地に関する記事、第二は各支部の報告などアメリカ国内の活動に関する記事、第三は献金状況や会計収支などの報告である。この中で第一の内容が占める割合は圧倒的である。インド、中国、日本などに派遣された女性宣教師が設立した学校、病院、孤児院、異教地の風景や女性の姿などが銅版画のイラスト(後に

写真) 入りで巻頭に紹介されているのを初めとして、女性宣教師が記した異教地の地理、歴史、文化、生活習慣などについての読み物が続く。さらには、女性宣教師の近況報告、伝道地に関連した新聞や雑誌記事の抜粋、異教地に関してより詳しく知ることができる文献の紹介などが掲載されている。

また「Uniform Reading for the month」と題して、毎月異なったテーマが掲げられ、そのテキストとなる記事が提示されて、それをもとに補助協会 (auxiliary society) 単位での読書会が催されている。テーマは、インド、中国、日本といった伝道国についてや女性海外伝道運動の歴史、協会運営資金の調達方法など、多岐にわたっている。伝道地の学習は毎年繰り返し実施され、テーマも年を追うごとに詳細になっている。例えば初期には国名が大きなテーマとして示されていたが、次第に都市単位となったり、芸術、教育といったより具体的なテーマへと進展している。また、1885年には「Uniform Reading」が「Uniform Study」と変わった。それぞれのテーマに沿ったいくつかの学習ポイントが示され、読ませることから学ばせることへと姿勢の転換が図られている。

以上示したように、機関誌を媒介として、女性宣教師による伝道地の情報がアメリカにもたらされ、アメリカの女性たちはそこから海外についての知識を得て、女性海外伝道運動への参加意識を高めるといふ一つの流れが形成されていたことがわかる。19世紀北米に住む女性の大半は、自分たちの大陸以外の世界について、その多くを女性宣教師の報告から学んでいたと冒頭に記したが、それは女性海外伝道運動の中にこのような学習のシステムが組み込まれていたことによるものである。グループ学習を核とするこの統一学習システムは、地理的に緻密な組織を作り上げていたメソジスト監督派教会女性海外伝道協会が編み出したもので、他教派にも影響を与え

た。協会設立に難色を示した教会も「女性海外伝道協会のメンバーになることは高等教育を受けるに等しい」と、このシステムを後に称賛した¹⁸⁾。20世紀初頭までにいずれかの教派の女性海外伝道協会会員になったアメリカ人女性の数は、160万人とも200万人とも言われている¹⁹⁾が、地理学的知識の女性への普及という観点から見て、15万人以上の会員を擁したメソジスト監督派の機関誌の影響力は特に大きかったと推測できる。

日本について言えば、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会による女性宣教師の派遣が開始された時期は、オールコックの『大君の都』(1863年)が既に出版されていたので、全くの未知なる国ではなかったはずである。しかし、お雇い外国人や欧米人旅行者などによる日本見聞記が数多く書かれるようになるのは、もう少し後のことであり、女性宣教師の報告は、女性の生活者による明治初期の日本体験記という希少かつユニークな特色を帯びてスタートしたと言える。次章以降は、どのような日本に関する情報がアメリカにもたらされ、機関誌の読者がそこから何を学んだかを見て行くことにする。

IV. *Heathen Woman's Friend* に見る日本関係記事

(1) 日本関係記事の特徴

1874年日本への女性宣教師派遣開始以来、機関誌 *Heathen Woman's Friend* には、ほぼ毎号日本に関する記事が掲載されている。設立した女学校の運営状況、その土地の様子や風俗、習慣、さらには日本の地理、歴史、文化などが紹介されている。表1は、1874(明治7)年から1895(明治28)年に掲載された主要な日本紹介記事を示したものである。これらは、主に女性宣教師の在任地の様子や日本の地理、歴史、文化などの紹介を目的に書かれたものであり、生徒数や校舎の様子など女学校の運営報告を主目的としたものは除外

表1 *Heathen Woman's Friend*に掲載された日本関係記事

掲載年	巻号数	頁数	タイトル/トピック	著者
1874(明治7)	6-2	693-5	函館の日曜日	Harris, F. (宣教師の妻)
75(明治8)	7-3	57-8	弘前便り	Ing, L. (宣教師の妻)
	7-4	76-7	津軽より	Ing, L. (宣教師の妻)
76(明治9)	8-7	103	日光訪問	<i>Woman's Work for Woman</i> より転載
77(明治10)	8-8	178	日本の女性について	Ing, L. (宣教師の妻)
78(明治11)	9-8	181-2	日本の葬式	<i>Life and Light</i> より転載
	10-5	115	日本の教育	<i>Helping Hand</i> より転載
	10-6	128-9	日本の着物	<i>Helping Hand</i> より転載
	10-6	142	日本人形	<i>Helping Hand</i> より転載
	10-7	165-6	日本の休日	<i>Missionary Link</i> より転載
79(明治12)	10-8	176-7	日本の第一印象	Holbrook, M. (女性宣教師)
	10-9	193-4	日本の迷信	無記名
	11-2	29-30	日本便り I	Holbrook, M. (女性宣教師)
	11-2	32-3	日本の下駄	Spencer, M. (女性宣教師)
	11-3	50-2	日本便り II	Holbrook, M. (女性宣教師)
80(明治13)	11-5	105-6	日本の花々	Holbrook, M. (女性宣教師)
	11-10	222-3	函館について	Priest, M. (女性宣教師)
	11-11	241-2	日本の女性	無記名
	12-3	70	日本の子供	<i>Missionary Link</i> より転載
	12-5	98-9	長崎：人々と宗教	Russell, E. (女性宣教師)
81(明治14)	12-5	102-3	日光での休暇	Holbrook, M. (女性宣教師)
	12-6	125-7	長崎：人々と宗教 II	Russell, E. (女性宣教師)
	12-9	205-10	日本 I・II	Soper, D.S. (元女性宣教師)
	12-10	229-32	日本 III	Soper, D.S. (元女性宣教師)
	13-3	66-7	東京・横浜・函館・長崎	Priest, M. (女性宣教師)
	13-4	86-7	長崎について	Russell, E. (女性宣教師)
	13-5	105-6	函館とアイヌ集落 I	Holbrook, M. (女性宣教師)
	13-6	127-9	函館とアイヌ集落 II	Holbrook, M. (女性宣教師)
	13-6	134	Miss Holbrook との蝦夷の旅	Woodworth, K. (女性宣教師)
	13-7	152-3	函館とアイヌ集落 III	Holbrook, M. (女性宣教師)
82(明治15)	13-7	153-4	仙台訪問	Priest, M. (女性宣教師)
	14-12	279-81	日本	Hart, I. (協会ボルチモア支部長)
83(明治16)	15-4	81-2	大阪からの帰路	Holbrook, M. (女性宣教師)
	15-8	178	日本酒	無記名
84(明治17)	15-12	287	日本の布団	Spencer, M. (女性宣教師)
	16-1	1-3	アイヌの少女	Squier, L. (宣教師の妻)
	16-3	59	鹿鳴館での慈善バザー	Holbrook, M. (女性宣教師)
	16-3	69	子供の日の横浜	Benton, J. (女性宣教師)
	16-5	97	函館の少女	Famisfar, F. (女性宣教師)

掲載年	巻号数	頁数	タイトル/トピック	著者
1885(明治18)	16-8	178-9	仏教寺院	Harris, F. (宣教師の妻)
	17-4	84-5	日本：社会習慣と宗教	Benton, H. (協会本部役員)
86(明治19)	17-7	153-4	日本人女性の洋装	無記名
	17-9	211-2	弘前・藤崎訪問	Green, C. (宣教師の妻)
	18-3	58	アイヌ	無記名
87(明治20)	18-11	291	名古屋への旅	Holbrook, M. (女性宣教師)
	18-12	313-4	福岡への旅	Smith, L. (女性宣教師)
88(明治21)	19-10	265-6	日本の習慣	長崎の女学校生徒
	19-10	271	信州の寒さ	Elmer, E. (宣教師の妻)
	19-12	320	神道式埋葬	Spencer, S. (宣教師の妻)
	19-12	326	按摩	Elmer, E. (宣教師の妻)
	19-12	335-7	浅草寺	Van Petten, C. (女性宣教師)
	20-1	20-1	日本の学校生活 I	おふさ (横浜の女学校生徒)
	20-2	48-9	日本の学校生活 II	おふさ (横浜の女学校生徒)
	20-3	62-4	日本の偶像崇拜 I	McInturf, E. (宣教師の妻)
	20-4	93-4	日本の偶像崇拜 II	McInturf, E. (宣教師の妻)
	89(明治22)	20-8	203-4	浅間山登山
20-10		261-3	新しい宮殿	Holbrook, M. (女性宣教師)
21-3		66-7	米沢について	Griffiths, M. (女性宣教師)
21-3		77-9	稲作と米	函館の女学校生徒
90(明治23)	21-7	177	京都訪問	Vance, M. (女性宣教師)
	21-7	188	横浜の地震	French, A. (女性宣教師)
	22-3	付録	東京・横浜・名古屋	無記名
	22-4	付録	函館・弘前	無記名
	22-5	102-3	有馬より	Chappell, M. (宣教師の妻・元女性宣教師)
91(明治24)	22-5	付録	九州 (長崎・福岡・鹿児島)	無記名
	22-7	155-6	孟蘭盆	Spencer, M. (宣教師の妻)
	22-7	156-7	有馬より	Chappell, M. (宣教師の妻・元女性宣教師)
	22-10	227-9	日本における四時のお茶	Chappell, M. (宣教師の妻・元女性宣教師)
	22-10	229	日本の議会	たかた たや (東京の女学校生徒)
92(明治25)	23-7	157-8	日本の地震	Wilson, M. (女性宣教師)
	23-9	201-2	箱根	Pardoe, E. (女性宣教師)
	23-11	261-2	日本の皇女	Pardoe, E. (女性宣教師)
93(明治26)	25-4	付録	日本の偶像と寺院	無記名
	25-5	121-2	兵庫の大仏	Spencer, M. (女性宣教師)
	25-5	139	日本の商店	Dearing, M. (バプテスト派女性宣教師)
94(明治27)	25-11	330-2	弘前	Baucus, G. (女性宣教師)
95(明治28)	26-9	242-3	富士山	Cleveland, M. (宣教師の妻)

Heathen Woman's friend, Vol.5 - 26, 1874 - 1895.

(The Woman's Foreign Missionary Society of The Methodist Episcopal Church, Boston) より抽出
タイトル/トピックは筆者による翻訳

した。

女性宣教師からの書簡が記事の大部分を占めてはいるが、最初の数年は同じメソジスト監督派教会から派遣されていた男性宣教師の妻の書簡が頻繁に見られる(「函館の日曜日」, 1874; 「弘前便り」, 1875; 「日本の女性について」, 1877など)。それは恐らく女性宣教師の数が少なかった²⁰⁾ ことと、女学校の設立など伝道活動の足場造りに女性宣教師のエネルギーの大半が注がれていたため、当初は宣教師の妻が日本紹介の役割を引き受けていたのではないかと推測できる。また、*Missionary Link, Life and Light, Woman's Work for Woman, Helping Hand* といった他教派の女性海外伝道協会機関誌からの転載記事が多いのも初期の特徴である²¹⁾。教派間の垣根を超えて、女性宣教師の数少ない報告を利用し合っていたことがうかがえる。年数が経過してくると、女性宣教師が設立した女学校の生徒からの書簡が見られるようになる(「日本の習慣」, 1888; 「日本の議会」, 1891)。これらは女性宣教師の指導により書かれたものであろうが、女性宣教師による教育活動の成果を示そうとする狙いがあったと思われる。

取り上げられているトピックは多彩である。日本の歴史、地理、伝統文化、生活習慣、宗教、自然などを紹介したもの、日本の女性と子供のこと、横浜、東京、函館、長崎といった在任地の様子、休暇の際の旅行記など多様な話題が扱われている。ただし、日本の女性に対する関心は非常に高く、ほとんどの記事において女性への言及が見られる。つまり、日本の女性について様々な視点から報告がなされていると言えよう。これは読み手のほとんどが女性であるということと、「women's work for women (女性のための女性の仕事)」という女性海外伝道協会の活動意識が、女性宣教師の報告書簡に反映された結果であろう。

(2) 書き手としての女性宣教師の特徴

機関誌の日本関係記事に女性についての言及が多いのは、読者層と活動意識が反映されたものであることは上述した。このことは究極的には、女性海外伝道協会の活動を「女性のための女性の仕事」とであると強調することにより、教会という男性中心の権力機構に協会の存在意義を承認させようとする戦略の表れと見ることができる。同時代に活動したイザベラ・バード、メアリ・キングズリといった女性旅行家が、旅の記録を男性中心の地理学界に認知してもらうために、自らの女性性を極力覆い隠し、地理学界が求める客観性の基準に合致するような記述を志向した²²⁾ のとは対照的である。

女性宣教師は女性性を強調、女性旅行家が女性性を隠蔽と、方法是对極的であるが、その目指すところは、男性中心の権力機構への挑戦という点において共通していた。それは当時彼女たちの生活を規定していたヴィクトリア期の規範、つまり女性は家庭を中心とした私的領域に止まって生きるべきであるというモラルへの挑戦でもあった。ヴィクトリア期とは、言うまでもなく、英国ヴィクトリア女王の統治期間(1837年~1901年)を指すが、同時期のアメリカもヴィクトリア期のアメリカという呼称が定着している。そして、ヴィクトリア期の規範は、アメリカにおいても同様に、白人中流女性の行動様式や活動空間を規定していたことが、地理学の研究において明らかにされている²³⁾。

アメリカにおいて19世紀後半、女性海外伝道運動に参加した女性は、このヴィクトリア期の規範の中で生きていた中流白人女性であり、日本に派遣された女性宣教師も例外ではなかった。女性海外伝道運動は「女性のための女性の仕事」をスローガンに、母親が家庭において家族に愛情を注ぐことの延長線上にある活動であると主張されたが、異教女性へのキリスト教伝道のために海を渡った女性宣

教師の行動は、移動距離の大きさやその目的からして、女性の領域を家庭という私的空間から社会という公的空間へと拡大するものであった²⁴⁾ことはまちがいない。歴史家ウィリアム・オニールは、19世紀後半の女性海外伝道運動を評して、ソーシャル・フェミニズムの起源の一つと位置付け、参政権獲得を目指したラディカル・フェミニズムとの差異を示している²⁵⁾。ソーシャル・フェミニズムがラディカル・フェミニズムと異なる点は、実用主義的かつ非イデオロギー的に運動に取り組んだ姿勢にあり、ヴィクトリア期アメリカの繁栄に異議を唱えるものではなく、当時礼賛されていた女性間の友情(womanhood)に一致することから、多くの信仰心篤い中年層が抵抗なく運動に参加することができた²⁶⁾。

女性宣教師は、フィーメール・セミナリーあるいはフィーメール・アカデミーと呼ばれた女子中等教育機関を卒業後、教師をしていた者が多かった。良き妻、良き母として家庭を守ることが理想的な女性の生き方とみなされたヴィクトリア期において、白人中流女性に唯一許された職業である教師の道を選択したり、さらには、その経験を生かすべく、単身海を渡った女性宣教師たちは、かなり行動的な女性であり、その意味ではヴィクトリア期の規範を逸脱した女性と言えるかもしれない。このようなバックグラウンドを背負って日本にやって来た女性宣教師が、いかに明治期の日本を捉え、どのような表現を用いてそれをアメリカの読者に伝えたかを、次章では一女性宣教師の書簡をもとに考察したい。

V. 一女性宣教師の見た明治初期の日本

(1) メアリー・ホルブルックとその報告書簡
本章で考察対象として取り上げるのは、1878(明治11)年10月下旬に着任した女性宣教師メアリー・ホルブルック(Mary Holbrook)の1880年までの一連の報告書簡である。ホルブルックが来日した当時、メソジスト監督派

教会女性海外伝道協会派遣の在日女性宣教師は東京に2名、横浜と函館に各1名の計4名であった。既に述べたように、この時期女性宣教師は女学校の設立など足場造りの活動に多忙で、日本を紹介する報告書簡は主に宣教師の妻に委ねられていたようだが、ホルブルックは来日直後より定期的に日本の様子を報告し、表1からも明らかのように、初期の女性宣教師報告の中でその数は群を抜いている。

まずは簡単にホルブルックのプロフィールを紹介しておこう。1852年12月25日イングランドの地方牧師の家庭に長女として生まれたホルブルックは、3歳のとき一家でアメリカのペンシルベニア州に移住。13歳でコモン・スクールを終了し、同州にあるワイオミング・セミナリーに進学した。最優秀の成績で3年後に卒業、校長の推薦を得てボルチモア近郊の教師となった。教職にあった間二人の妹の学費を負担し、末の妹の卒業と同時に長年心に暖めていた宣教師になる夢の実現に動き出した。1878年5月ボストンで開催されたメソジスト監督派教会女性海外伝道協会の総会の場において、正式に東京への派遣が承認され、同年10月1日サンフランシスコを出発した²⁷⁾。10月21日東京に到着し、築地居留地に同協会が設立した海岸女学校(青山女学校の前身)の教師として活動を開始した。1881(明治14)年から84(明治17)年まで同校校長を務め、1887(明治20)年から90(明治23)年まで華族女学校(女子学習院の前身)で教鞭をとった。1890(明治23)年メソジスト監督派教会宣教師ベンジャミン・チャペルと結婚。1878(明治11)年の来日以来、数回の休暇帰国を除いて、生涯の大半を日本で過ごした。1912(明治45)年7月10日癌のため60歳で死去、東京の青山墓地に埋葬されている²⁸⁾。

Heathen Woman's Friend に掲載されたホルブルックの報告書簡を、表1を参照しながら見て行きたい。表1中、ホルブルック書

簡は太字で示した。1879(明治12)年の「日本の第一印象」に始まり、「日本便りⅠ」「日本便りⅡ」、日本の四季折々の花を紹介した「日本の花々」と、着任初年よりホルブルックは積極的に日本紹介を試みている。1880(明治13)年には、夏の休暇報告である「日光での休暇」を記している。ホルブルックは1881(明治14)年春に腸チフスに罹患する。その静養のため同年夏は函館で過ごしているが、病状が回復するとアイヌ集落を訪ねる旅に出る。旅の準備から帰宅までを紀行文にまとめたものが「函館とアイヌ集落」である。この紀行文はホルブルックの報告の中で最も長文のものであり、3回にわたって分載されている。1883(明治16)年には大阪で宣教師会議が開かれる。代表として出席したホルブルックは、会議終了後、大阪、奈良、京都を見物し、陸路東海道を経て東京に戻る。その様子が「大阪からの帰路」と題して報告されている。1884(明治17)年には、上流階級の女性たちによる慈善バザーが鹿鳴館で催され、成功を収めたことが報告されている(「鹿鳴館の慈善バザー」)。1884(明治17)年7月より86(明治19)年8月まで休暇で一時帰国²⁹⁾した後、1887(明治20)年には、女学校の視察に訪れた名古屋の印象を報告している(「名古屋への旅」)。1889(明治22)年には「浅間山登山」と題して登山の体験を記している。1887(明治20)年より90(明治23)年まで、ホルブルックは華族女学校の教師であった。その関係から、1888(明治21)年には完成した皇居新宮殿の内覧に招かれている。1889(明治22)年の「新しい宮殿」は、その様子を伝えたものである。1890(明治23)年に結婚した後も、ミセス・チャペル(Mrs. Mary Holbrook Chappell)の名で、ホルブルックは引き続き書簡を送っている。1890(明治23)年には、夏の休暇について有馬から2回の報告がなされている(「有馬より」, 1890・1891)。また1891(明治24)年には、日本の茶の湯について、その歴史を室町

時代にまで溯って紹介した「日本における四時のお茶」を記している。

セミナー時代の恩師は、ホルブルックを評して「すべての教科にバランスよく優秀であったが、特に語学力と文章力は抜き出しており、作文は殊更に上手であった。」と語っている³⁰⁾。ホルブルックの語学力は日本語習得にも生かされ、彼女の日本語力は宣教師の間でも一目置かれていたようである³¹⁾。1885(明治18)年にホルブルックが日本人女性向けに日本語で行った講演の記録が、小冊子となって残されている³²⁾。それを見ると、流暢に日本語を使いこなしていたことがわかる。日本語能力や文章力に優れていたホルブルックにとって、日本の様子を報告することは、職務というよりも一種の楽しみであったのではないだろうか。ホルブルックが他の女性宣教師よりも頻繁に報告を書き送っていたどうかは定かではない。しかし、ホルブルック書簡が他よりもはるかに多く機関誌に掲載されている事実は、機関誌編集者から内容を評価され、多くの掲載機会を得ていたことを示している。次節では、ホルブルックの最初期の報告である「日本の第一印象」「日本便りⅠ」「日本便りⅡ」「日本の花々」「日光での休暇」の5書簡に焦点を当て、その内容を分析したい。なお、本文中に引用する書簡文は、筆者の拙訳による。

(2) ホルブルックの日本報告とその特徴

欧米人による明治日本探訪記の多くが、横浜港へと近づく船のデッキから臨む富士山の光景を、感動をもって記しているように、ホルブルックの書簡も、雪を戴いた富士山の姿を称賛することから始まっている。横浜上陸後、初体験の人力車に揺られ、狭い道をうねりながら山手の居留地へと向かう道中で目にしたのは「建物が整然と立ち並びアメリカの都市と見まごう居留地と、家屋や商店が低く軒を連ねた日本人町との著しい景観の違

い」であった。山手居留地は海外沿いの居留地が手狭になったため、新たに設けられたもので、ホルブルックを乗せた人力車は、波止場から海外沿いの居留地と日本人町を抜けて山手へ至ったと考えられる。ホルブルックは山手居留地の宣教師宅に泊り、翌日、活動の場となる東京築地の居留地へと向かった。築地居留地もまた「アメリカの町のようにあり、ここが東京の中にあるとは信じがたい」とその第一印象を記している。（「日本の第一印象」・「日本便りⅠ」, 1879）

ホルブルックの日本報告には、多くの植物が登場する。秋の日本到着に始まる四季の体験を、樹木や花々の紹介を通して巧みに表現している。10月下旬の着任以来秋を深め、冬へと移り変わりゆく東京の風景を「茶色い落ち葉と裸木から成る単調で死んだようなアメリカの景観とは異なり、常緑樹と竹林が豊富にあることによって依然美しさが保たれている」（「日本便りⅡ」, 1879）と伝え、アメリカとの対比を用いて東京の景観の特徴を説明することにより、読者の理解を容易にしている。「日本の花々」（1879）はタイトル通り、日本の花を紹介したものである。短い報告の中に、日本到着時に咲いていたキクに始まり、ツバキ、モモ、サクラ、バラ、ツツジ、フジ、ヨシ（spirea）と、満開の花の様子を次々に解説している。例えばツツジは「緋色のツツジはまるで山肌に広がるキャンプファイヤーのように照り輝き、白いツツジは燃え立つ緋色の姉妹ツツジの中で溶けてゆく雪のようである」と記し、一枚の絵画をイメージさせるような視覚性に富んだ描写がなされている。「日光での休暇」（1880）では、日光までの道中と東照宮の様子が報告されているが、日光へ至る例幣使街道の風景や道端に咲く花の記述に、ホルブルックの個性が強く表れている。「翌朝私たちは人力車に乗った。旅の最後の60マイルは雄大な古い杉並木を通り抜けた。その枝々はほとんど私たちの頭上

で交差していた。しばらくの間、道の両側に小川が静かに流れていた。それは柔らかく低い音色でデュエットを奏でているようであり、無趣味な私でさえも詩を口ずさんでしまいそうなほど甘美な歌声であった。沿道には大きな金色の核をもったユリとピンクの房のついたオジギソウが咲いていた。また、そこにたくさんの山アジサイが見られ、それらはスコットランドの雪の塊のように白かった。さらに堀には白やバラ色のハスの花が美しく浮かんでいた。それはアメリカに咲く艶やかな花卉をもったスイレンの花と愛らしさの点において、甲乙つけがたい。それから可愛いシダや上品なハンショウズル、華麗なツタも見えた。そして、これらすべてのほかに、遙かかなたの丘陵地帯や緑たつ水田がその麓まで伸びている風景、古風な趣のある屋根と良く手入れされた前庭をもつ絵のように美しい農家といった豊かな美がさらに存在していた。人力車の全行程を今思い返すと、それは一つの美しい夢のようであり、目覚めることに苦痛さえ感じるほどである。」と記述され、詩的な表現を用いた詳細な植物観察記となっている。

ホルブルックは明らかに植物に対する関心が高く、またかなりの知識も持ち合わせていたと推測できるが、これは彼女個人の資質というよりも、ヴィクトリア期の白人中流女性に共通する資質と見ることができる。なぜならば、植物に関心をもつことは、女性にとって一つの教養であり、英国ヴィクトリア期を専門とする歴史学者の井野瀬は、ヴィクトリア期ほど女性と植物とが密接に結びついた時代もなかったのではないかと述べている。その理由として、女性は植物に関心をもつことで、知的になりすぎるという危険を冒すことなく、ほどよい教養や美意識、女性らしい気配りを育むことができる。しかも、動物とは異なり、植物においては性的問題をさほど気にしなくてもよいので、性的タブーを犯す心

配もなかったからである。当時多くの学術団体が女性の入会を拒否していた中であって、英国植物学会が当初から女性会員を認めていたこと、絵画の世界でも植物画の分野では、女性が男性以上に優れた作品を残していることなども、ヴィクトリア期の女性と植物との深い関わりを示していると井野瀬は指摘している³³⁾。

ヴィクトリア期のアメリカにおいても、女性は花に親しむことが奨励されていた。この時期ホーム・ガーデニングが中流階級のレジャーとして人気を呼んでいたが、芝生の手入れは男性の領分、花を育てることは女性の領分と明確な線引きがなされ、女性が一日を家事と花の栽培にあてている姿こそ、最も女らしく見えるとさえ言われた³⁴⁾。ホルブルックが日本で目にした植物の名称を詳細に記述し、読み手であるアメリカ人女性が、それをもとに日本の風景をイメージするという図式が可能であるのは、ヴィクトリア期の女性が身につけていた教養によるものである。今日ではあまり馴染みのない植物も、ヴィクトリア期の女性の間では、よく知られた存在だったのであろう。

本章で取り上げたホルブルックの日本報告の中では、植物の記述にヴィクトリア期の女性の教養が最も顕著に表れていると考えるが、その他のトピックにおいても、ヴィクトリア期の女性の規範、教養、良識といったものを象徴するような記述が認められる。ホルブルックは来日早々、東京には盲人の多いことに驚き、その原因は暗い風通しの悪い家屋、栄養価の低い食事、様々な生活の悪習慣にあるのではないかと推測している（「日本の第一印象」, 1879）。また、築地居留地に設立した女学校の生徒が、おしなべて虚弱体質であることを憂慮し、彼女たちに自己の健康管理意識と屋外運動の習慣が欠如しているためであろうと記している（「日本便りⅡ」, 1879）。ヴィクトリア期アメリカの中流階級にとっ

て、清潔、健康は共通の関心事となりつつあった。そして、その普及を実践的に担っていたのが女性であった。19世紀のアメリカは平均寿命の延びや乳児死亡率の低下が著しかったが、それは単に医学の発達によるばかりではなく、中流階級の女性が健康管理、公衆衛生、栄養改善などの問題に対して積極的な取り組みを行ったことも一因している。健康の専門雑誌や女性雑誌の特集を通じて、女性は科学的に根拠のある情報を得、日常生活の場でそれを実践した³⁵⁾。また女性宣教師を多く輩出した教育機関フィーメール・セミナリーやフィーメール・アカデミーで最も使用されていた教科書には、血液の循環など医学的な知識が盛り込まれていた³⁶⁾。このような健康に対する関心が高まる中、次世代を生み育てる性としての女性の身体や健康についての再考も始まる。コルセットによる締め付けから身体を解放し、体を動かすこと、特に屋外での運動が健康維持に不可欠であるとの論説が医学雑誌に掲載され、教育関係の雑誌では女子教育における体育の必要性が叫ばれた。フィーメール・セミナリーやフィーメール・アカデミーの多くは率先して多様な体育活動を取り入れた³⁷⁾。ホルブルックが日本の第一印象として日本人の健康状態に触れているのは、以上のようなヴィクトリア期アメリカ社会の共通の関心とホルブルック自身のフィーメール・セミナリーにおける経験に由来するものと言えよう。

またホルブルックは「来日前に読んだ文献には、日本人は風呂好きで清潔ではあるが、その風呂とは煮えたぎる湯が満ちた釜で、辛うじて頭が出せる蓋に覆われており、日本人はその中に一時間も浸っている、と書いてあった。奥地ではそうなのかもしれないが、東京とその周辺に限って言えば、それは誤りである。湯船はアメリカのものより深く、湯の温度はアメリカ人にはまだ少し熱すぎるだろうが、快適な暖かさである。」と伝えている

(「日本便りⅡ」, 1879)。実際, 1873(明治6)年東京府は熱い湯好きの江戸っ子が多いのに対して, 銭湯の熱湯を厳禁とする通達を出していた³⁸⁾。文献情報と実地見聞との差をホルブルックは指摘しているのであるが, これも健康問題に関心の高いヴィクトリア期女性らしい観察である。

東京の気候に関しては, ホルブルックは「冬は雪が少なく心地よいが, 夏の蒸し暑さは, 良き主婦であるならば, ととても平静ではいられないものである。」と表現している(「日本便りⅡ」, 1879)。なぜならば「湿度があまりに高いため, 衣類に黴びを生やさないようにするのは至難の業である。家具の接着剤は柔らかくなり, いすに座ると一体どこまで体が沈み込んで行くのか不安になる。」ほどで, きちんと家庭を整えておきたい主婦にとっては問題の多い季節ということになる。このような家事に纏わる具体的なエピソードを引いて, 日本の気候の特色を語ることも, 家庭は女性の領域の中心であるというヴィクトリア期の規範を映し出していると言える。

日本の少女の姿で第一にホルブルックの目を引いたのは, 小さく骨張った手と特徴的な髪形であった。「彼女たちの髪は非常に複雑に結び上げられており, それに誇りをもっていることは疑いない。アメリカの母親は毎年春と秋になると, 娘のために流行のスタイルの帽子やボンネットを求めて, あちこちの店を捜しまわれなければならないが, 日本の母親はそのような煩わしさから解放されていて, なんとなくやましいことか。」とコメントしている(「日本便りⅡ」, 1879)。ホルブルックの日本報告は, これまで見てきたことから明らかなように, ヴィクトリア期の女性に求められた規範が色濃く反映されている。しかし, 女性がコルセットで体を締め付けたら, 帽子の流行を追うことに忙殺されるような習慣に対しては批判的であり, 規範を絶対視していたわけではない。ヴィクトリア期の

規範は, 日本の外国人居留地にも持ち込まれており, ホルブルックは靴やドレスの流行をとにかく言う居留地婦人のことを後に苦々しく記している³⁹⁾。

ヴィクトリア社会から地理的に離れた日本という場所に身を置いたことにより, それまでの自己を規定していた文化を, 相対化して見つめ直すという作業が自ずとなされ, その結果として, 自国の文化における健康や衛生に対する取り組みなどを改めて評価するとともに, 女性を肉体的にも精神的にも束縛するような慣習を無意味なものとするという態度が報告に表れている。ホルブルックの日本報告は, 明治初期の日本体験記であるのと同時に, ヴィクトリア期アメリカの姿を逆照射するものでもあると言えよう。

VI. おわりに

女性宣教師の明治期における日本報告とは, 書き手である女性宣教師と読み手であるアメリカ人女性が共有するヴィクトリア期の女性に求められた規範, 教養, 良識といったものを媒介とした情報伝達であったということが, 本研究では明らかにできたと考える。だが, その情報の正確さについては, 今後より詳細な検証がなされるべきであるのは言うまでもない。例えば, イザベラ・バードの *Unbeaten Tracks in Japan* における動植物の記述に関して, 英国人動物学者ブラキストンがその信憑性に疑問を呈した⁴⁰⁾ ように, ホルブルックの植物に関する記述も, 植生地理学の観点から正確に考察される必要がある。また, ホルブルックの記述から受ける印象のごとく, 当時の日本人が健康や公衆衛生に対してほとんど無知無関心であったと判断するのは早計である。ヴィクトリア期アメリカのように, 女性がそれらの責任を自覚するようになるのは明治期の後半になってから⁴¹⁾ と言われているが, ホルブルックが報告を書いた時期には, すでに行政政策として, 公選

の衛生委員制度が設けられ、公衆衛生や食品衛生に関する条例や取り締まりが府県や町村単位で実施されていた⁴²⁾ことを看過すべきではない。女子教育における体育の必要性もまたすでに認識されていた。数年間をかけて行った女子体育術に関する調査結果をもとに、1877(明治10)年には、東京女子師範学校において体育術の授業が取り入れられていた⁴³⁾。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会が築地に開設した女学校は、貧困家庭の女子を奨学生として積極的に入学させていた⁴⁴⁾ことから、ホルブルックが目にした女学生の多くは、それまで十分な教育を受けてこなかった女性たちと思われる。したがって、彼女らを当時の女学生の典型的な姿と見なすことはできない。

筆者は、本研究の冒頭において、19世紀アメリカの女性の大半は、自分たちの大陸以外の世界について、その多くを女性宣教師の報告から学んでいたと記した。女性海外伝道協会の中で最大の組織であったメソジスト監督派教会女性海外伝道協会の機関誌における日本に関する報告を考察した限りにおいては、情報量の多さという点のみならず、選択されたトピックがヴィクトリア期アメリカの女性に共通の関心事を多く扱っている点から、読者は内容の理解が容易であり、多くのことを知り得たと言えよう。

本研究は、1878(明治11)年に来日したメアリー・ホルブルックという一女性宣教師が記した1880(明治13)年までの書簡に焦点を当てたが、1881(明治14)年以降のホルブルック書簡にも、多くの地理学的に興味深い情報が記されている。中でも、1881(明治14)年から82(明治15)年にかけて3回にわたり機関誌に連載された「函館とアイヌ集落」は、欧米人女性による蝦夷探訪記として注目すべきものであり、稿を改めて論じたいと考えている。また、本研究では詳しく触れなかった1896(明治29)年以降、つまり機関誌名が *Woman's*

Missionary Friend に変更された後、日本の時事問題を取り上げた報告が登場してくる。女性宣教師が生活者の視点から日本の時事をいかに報じていたかを考察することも、今後の研究課題としたい。

(お茶の水女子大学大学院・院生)

〔注〕

- 1) 19世紀アメリカのプロテスタント教会における女性海外伝道運動については、齋藤元子「19世紀後半アメリカにおける女性の領域と女性海外伝道運動」、お茶の水地理、40、1999、33～38頁参照。
- 2) プラング、M. 著、鳥海百合子訳『東京の白い天使 - 近代日本の社会改革に尽くした女性宣教師キャロライン・マクドナルド -』、教文館、1998、6頁。(Prang, M., *A Heart at Leisure from Itself: Caroline Macdonald of Japan*. UBC Press, 1995.)
- 3) プラング、前掲2) 402～403頁。
- 4) 例えば、竹内は19世紀末までに西欧世界へもたらされた日本に関する地理学的知識を以下のように系統だてている。14世紀初頭のマルコ・ポーロによるジパングの記述を嚆矢として、16世紀後半におけるイエズス会宣教師による日本通信、江戸時代のオランダ商館長付医師ケンペルやシーボルトらによる江戸参府の記録、そして開国後は、英国公使オールコックの *The Capital of the Tycoon* (1863年、山口光朔訳『大君の都 - 幕末日本滞在記』1962年、岩波書店) を皮切りに、1874年外国人に対する旅行規制の緩和により、75年以降お雇い外人や商人らによる日本見聞記が欧米で出版されるようになる。それらは西欧人の旅心を刺激し、更なる日本探訪記を生む。その中でも英国人女性旅行家イザベラ・バードの *Unbeaten Tracks in Japan* (1880年、高梨憲吉訳『日本奥地紀行』1973年、平凡社) は、ガイドブックとして長いこと読み継がれる。また英国公使館員サトウらの手により、旅行者のためのハンドブックも1881年に編纂される。(Takeuchi, K., "Some remarks on

- the texts by foreigners on Japan up to the end of the nineteenth century – How they changed the image of Japan abroad and the impact they had on the landscape sensibilities of the Japanese –,” *Regional Views*, 12, 1999, pp.1-4.)
- 5) 1880年以前に出版された欧米人による幕末・明治日本滞在記としては、既に紹介した Alcock, Rutherford, *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, Longman, London, 1863 (オールコック, R. 著, 山口光朔訳『大君の都 - 幕末日本滞在記』岩波書店, 1962) の他, Griffis, William E., *The Mikado's Empire*, Harper & Brothers, New York, 1876 (グリフィス, W.E. 著, 山下英一訳『明治日本体験記』〈『皇国』第二部〉平凡社, 1986), Prunyn, Mary, *Grandmama's Letters from Japan*, J.H.Earle, Boston, 1877 (プライン, M.P. 著, 安部純子訳著『横浜の女性宣教師メアリー・P・プラインと「グランドママの手紙」』EXP, 2000), Carrothers, Julia, *The Sunrise Kingdom or Life and Scenes in Japan and Woman's Work for Woman There*, Philadelphia, Presbyterian Board of Publication, 1879. が挙げられる。グリフィスは福井の藩校に化学教師として赴任したアメリカ人, プラインとカロザースはともにアメリカ人女性。プラインは超教派の女性一致海外伝道協会より派遣された女性宣教師で1871年から75年まで横浜で活動した。カロザースは長老派宣教師の妻で1969年から77年まで東京と広島に暮らした。欧米人女性による明治日本見聞記は、本研究の対象も含めて、女性宣教師と宣教師の妻が先鞭をつけたと言うことができる。
- 6) メソジスト教会は18世紀英国国教会から分離したプロテスタント教派。メソジストの由来は、ジョンとチャールズのウェスレー兄弟 (John & Charles Wesley) らが指導するオックスフォード大学学生による神聖クラブ (Holy Club) が敬虔な信仰に基づく厳しい戒律に従い、神学研究などに励み、修道者的な生活を重んじ、メソジスト (方法家) と揶揄されたことに始まる。アメリカへは、1760年に最初の宣教師が送られ、独立戦争を経て、1784年米国メソジスト監督派教会 (The Methodist Episcopal Church, U.S.A.) が組織され、やがてアメリカで最大のプロテスタント教派となる。日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』, 教文館, 1998, 1395頁。
- 7) Baker, F.J., *The story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, Cincinnati, Cranston & Curts, New York, Hunt & Eaton, 1896, pp.11-23・p.29・pp.423-431.
- 8) メソジスト監督派教会女性海外伝道協会憲章によると、年間10ドル以上の寄付を行った女性は誰でも、居住地から一定の範囲をテリトリーとする補助協会を組織することができた。会長1名、副会長もしくは幹事3名以上、書記、通信係、会計各1名を選出し、これらの役員が集まって地方の実行委員会を形成した。Wheeler M.S., *First decade of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, with sketches of its missionaries*, Phillips and Hunt, New York, 1881, p.341.
- 9) Hill, P.R., “Heathen Women's Friends: The role of Methodist Episcopal Women in the Women's Foreign Mission Movement, 1896-1915,” *Methodist History*, 19-3, 1981, pp.146-147.
- 10) 本多繁「米国メソジスト監督教会の外国宣教機関と明治中期迄の日本宣教」, キリスト教史学, 43, 1989, 28~29頁。
- 11) 1894 (明治27) 年の条約改正までは、宣教師が居留地外に不動産を所有する権利が認められていなかったため、福岡以下の都市では、地元の有力なキリスト教支持者、信者あるいは知識階級が発起人となって女学校を設立し、経営面の責任を負った。本多繁『続・米国のプロテスタンティズムと日本人』丸善仙台支店, 1994, 32・54頁。
- 12) 齋藤元子「米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会による明治期の日本における文書活動 - 雑誌『常磐』を中心として - 」, ウェ

- スレー・メソジスト研究, 2, 2001, 37~54 頁。
- 13) Isham, M., *Valorous Ventures: A record of sixty and six years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, The Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church Publication Office, Boston, 1936, p.442.
- 14) Baker, 前掲7) p.73.
- 15) 誌名変更の理由として, *Heathen Woman's Friend* の人気のある部分を残しつつも, より気取りのない名称が好ましいと判断したため, と説明されている。*Heathen Woman's Friend*, 27-6, 1895, p.157. 「Heathen (異教の)」という語のもつ堅苦しいイメージを排除しようとの意図が窺える改名である。
- 16) Baker, 前掲7) pp.73-76.
- 17) Baker, 前掲7) pp.86-89. 1896年 *Heathen Woman's Friend* が *Woman's Missionary Friend* に改名されたのに伴い, *Heathen Children's Friend* も *Children's Missionary Friend* に変更された。*Heathen Woman's Friend*, 前掲15) p.156.
- 18) Isham, 前掲13) p.42.
- 19) Hill, P.R., *The World Their Household: The American Woman's Foreign Mission Movement and Cultural Transformation, 1870-1920*. The University of Michigan Press, Ann Arbor, 1985, p.195.
- 20) 日本へ派遣された女性宣教師は, 1874年東京へ1名, 76年東京へ1名, 78年横浜へ1名, 函館へ1名, 東京へ2名, 長崎へ2名……と増加していった。Baker, 前掲7) p.429.
- 21) *Missionary Link* は女性一致海外伝道協会(超教派), *Life and Light* は会衆派, *Woman's Work for Woman* は長老派, *Helping Hand* はバプテスト派の各女性海外伝道協会機関誌。
- 22) Domosh, M., "Toward a Feminist Historiography of Geography," *Transactions of the Institute of British Geographers*, N.S.16, 1991, p.99-100. (ドモシュ, M. 著, 齋藤元子訳「地理学の新しいフェミニスト歴史叙述をめざして」, 空間・社会・地理思想, 6, 2001, 155~156頁。)
- 23) Bondi, L. and Domosh, M., "On the Contours of Public Space: A Tale of Three Women," *Antipode*, 30-3, 1998, pp.278-281.
- 24) 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師-来日の背景とその影響-』, 東京大学出版会, 1992, 36頁。
- 25) O'Neill, W.L., *Everyone was Brave: A History of Feminism in America*, Quadrangle Books, Chicago, 1971.
- 26) Michell, N.T., "From Social to Radical Feminism: A Survey of Emerging Diversity in Methodist Women's Organizations, 1869-1974," *Methodist History*, 13-3, 1975, pp.23-26. womanhood に関しては, Cott, N.F., *The Bonds of Womanhood: 'Woman's Sphere' in New England, 1780-1835*, Yale University Press, New Haven, 1977; Welter, B., "The Cult of True Womanhood 1820-1860," *American Quarterly*, 18, 1966, pp.151-174.; Smith-Rosenberg, C. "The Female World of Love and Ritual: Relations Between Women in Nineteenth-Century America," *Signs*, 1 (Autumn), 1975, pp.1-29. (Welter と Smith-Rosenberg の論文はデグラウ, C.N. 他著, 立原宏要訳『アメリカのおんなたち-愛と性と家族の歴史-』教育社, 1986, 55~136頁所収) 参照。
- 27) Wheeler, 前掲8) p.299 - 306.
- 28) クランメル, J.W. 編『来日メソジスト宣教師事典1873~1993年』教文館, 1996, 119頁。
- 29) *Heathen Woman's Friend*, 16-2, 1884, p.34; *Heathen Woman's Friend*, 18-4, 1886, p.97.
- 30) Wheeler, 前掲27) pp.301-302.
- 31) *Woman's Missionary Friend*, 44 - 10, 1912, p.360.
- 32) 米国女教師メリ, ゼ, ホルブロック『靈魂の糧の勧め』, 美以美雑書会社出版, 1885, 12 頁。

- 33) 井野瀬久美恵 『女たちの大英帝国』 講談社, 1998, 73~75頁。
- 34) Welter, 前掲26) p.165; Schlereth, T.J., *Victorian America: Transformations in Everyday Life 1876-1915*, Harper Collins Publishers, New York, 1991, pp.138-139.
- 35) Morantz, R.M., "Making Women Modern: Middle Class Women and Health Reform in 19th Century America," *Journal of Social History*, 10, 1977, pp.490-507.
- 36) Farello, E.W., *A History of the Education of Women in the United States*, Vantage Press, New York, 1970, p.128.
- 37) Park, R., "“Embodied Selves”: The Rise and Development of Concern for Physical Education, Active Games and Recreation for American Women, 1776-1865," *Journal of Sport History*, 5-2, 1978, pp.5-41.
- 38) 全国公衆環境衛生同業組合連合会編『公衆浴場史』 同史編纂委員会, 1972, 488頁。
- 39) *Heathen Woman's Friend*, 13-5, 1881, p.106.「函館とアイヌ集落 I」の中に記している。
- 40) Blackiston, T.W., *Japan in Yezo*, The Japan Gazett Office, Yokohama, 1883. (ブラキストン, T.W.著, 高倉新一郎校訂, 近藤唯一訳 『蝦夷地の中の日本』 八木書店, 1979, 633頁。) バードの *Unbeaten Tracks in Japan* には多くの植物に関する記述が見られるが, ブラキストンのバード批判の中に「ラテン語の学名が不必要に羅列されている(中略)ふつうの読者なら植物学辞典と首っ引きして参照しないかぎり, 何が何だかさっぱりわからない」(ブラキストン, 343頁。) という指摘がある。ここからもバードがヴィクトリア期の女性として植物に強い関心を抱いていたことがわかる。
- 41) 成田龍一「衛生環境の変化のなかの女性と女性観」(女性史総合研究会編『日本女性生活史 第4巻 近代』, 東京大学出版会, 1990), 120頁。
- 42) 成田, 前掲41) 93頁。下川耿史・家庭総合研究会編『明治・大正家庭史年表1868→1925』 河出書房新社, 2000, 96・100・104・106・108頁。
- 43) 桑原三二『高等女学校の成立 高等女学校小史-明治編』 高山本店, 1982, 181頁。
- 44) Baker, 前掲7) p.321.

Reports from Japan in the Early Meiji Era
by American Female Missionaries

SAITO, Motoko

American Protestant churches in 19th century devoted themselves to foreign missions. During the last half of the century, woman's foreign missionary societies were organized in almost every denomination and many female missionaries were sent out to heathen countries. Those female missionaries eagerly wrote reports about the geography, history and culture of the countries they were in and their reports appeared in periodicals published by each woman's foreign missionary society. It is said that many American women then gained knowledge about foreign countries mainly through those periodicals.

This paper aims to study the reports written in the early Meiji era by American female missionaries stationed in Japan. As the most suitable case study, the reports in *Heathen Woman's Friend* which was the periodical of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church are examined. The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church was the largest woman's foreign missionary society among all denominations and started to send their missionaries to Japan in 1874. By the end of Meiji era, 83 women had come to Japan. They chose diverse topics for their reports covering history, geography, culture, social customs, religion, nature, women, children and so on.

This paper discusses a series of reports written from 1878 to 1880 by one Mary Holbrook. What Holbrook wrote strongly reflects the standard or culture which Victorian society in 19th century America expected of women. Holbrook described many kinds of plants she had seen in Japan. This is a good example showing the breadth of knowledge Victorian women had obtained. Learning botany was widely considered one of the marks of a culturally educated middle class woman. As both Holbrook and her readers had in common knowledge of botany, what Holbrook wrote about plants probably helped the readers image the landscape of Japan more richly. Besides plants, Holbrook commented at length about the health condition of people in Japan and the hair style of Japanese women. These were also interesting topics for women in Victorian America.

Through the reports, Holbrook made much of the middle class American women's concern for hygiene and health. But, on the other hand, she criticized the Victorian life style which restrained women mentally and physically. This means Holbrook assessed her own culture relatively due to being in Japan, geographically removed from Victorian society.

As what Holbrook wrote: showed, the reports by female missionaries greatly relied upon and contributed to a commonality of knowledge and interests among middle class women in Victorian America. This makes the reports understandable and good materials to learn about Meiji era Japan.

Key words: American female missionaries, reports from Japan, early Meiji era, Victorian women